

シャドーイングが日本語学習者にもたらす影響

—短期練習による発音面および学習者意識の観点から—

唐 澤 麻 里

1. はじめに

シャドーイングとは「聞いた音に続いて影 (shadow) のようにできるだけ間をおかず発音していく練習法」を指し、従来は通訳者養成のために採用されてきた。Lambert (1988) は「聞く」・「話す」を同時に行うシャドーイングを同時通訳者にとって必須の下位技能と位置づけ、「オウムのようなスタイル」で、一語一語繰り返す訓練により獲得されるとした。しかし、後になり日本における英語教育分野でシャドーイングの研究を進めている玉井 (1997) はシャドーイングとは「オウムのような」機械的な繰り返しではなく、極めて認知的性格の強いものであるとし、「聞こえてくるスピーチに対してほぼ同時に、あるいは一定の間をおいてそのスピーチと同じ発話を口頭で再生する行為」と定義した。筆者も通訳英語の授業でシャドーイング訓練を受けた経験を持つが、それは単にメッセージを繰り返すこととは程遠いものであった。意味がある程度理解できないとシャドーイングが困難であること、自分の発音と聞こえてくる音声双方に注意を向ける必要があるなど、集中力を要する高度な認知的作業であることを実感した。それと共に学習意欲が上がり、語学習得において多角的な効果を持つ練習法なのではないかという可能性が窺えた。日本語教育に携わるようになり、そういった学習者としての経験から第二言語としての日本語習得にシャドーイングは有効であるのか、あるとすればどのような領域か、また練習によって学習者のやる気が引き出せるのか、など興味が湧いた。脳科学の発達によりワーキングメモリ (Working Memory)¹の役割が広く認識され、語学習得においてもシャドーイングの効果が報告されるようになった。しかし、日本語教育においてシャドーイングの実践は未だ導入期で、研究報告が出始めたところである。そこで筆者は2006年度にシャドーイングの基礎的研究として学習者1名を対象とした短期実践を行い、語学習得上の多角的観点から、シャドーイングによる同一個人内の能力の変化について修士論文としてまとめた。本稿ではその修士論文のデータを一部再分析し、短期間のシャドーイング練習が学習者の発音面と心理にどのような影響を与えるか報告することとする。(聴解力への効果については、唐澤 (2009) にて掲載)

2. 先行研究

2.1 シャドーイングと学習者の発音に関する先行研究

ここでは主にシャドーイングと発音、また学習者意識に関する研究をとりあげる。通訳者養成の立場から、鳥飼 (1997) はシャドーイングが英語のイントネーション・リズム・ストレスなどのプロソディー感覚をつかむのに非常に効果的であると述べている。三浦 (1997) も英語の口頭コミュニケーションで重要なリズム・抑揚・間の取り方・ストレスアクセントの置き方などを育成できるとしてシャドーイング

を推奨している。また染谷（1996b）もシャドーイングを英語のプロソディーセンスの育成・強化に大変効果的で、スピーキング力の向上につながる学習方法であるとしている。これらの研究に共通するのは従来通訳者訓練として採用されてきたシャドーイングを語学学習にも活かそうとしている点で、聴解面のみでなく発音技術向上にもシャドーイングが有効であると主張している。第二言語習得者の発音面への影響について検討した研究には Acton（1984）がある。流暢ではあるが未だ不正確な発音が残っているアメリカへの移民（英語非母語話者）を対象として、彼らの「化石化」された英語発音の改善法の一つとしてシャドーイングを用いた結果、リズムやストレスパターンに改善が見られたと述べている。また話者を見ながら、ジェスチャーや表情をもまねる練習を含めることで、発音の流暢さが増したという報告も行っている。日本語教育においては、萩原（2005）が中国人学習者を対象に約3ヶ月間のシャドーイング指導を行うことで、指導前と比べて促音・長音・撥音の誤用が大幅に減少し、半濁音と濁音の違い、また清・濁音の違いや母音の無声化などを合計して約40%の単音の誤用が減ったことを報告している。高橋（2006）では発音を意識したプロソディーシャドーイングが課題音読に与える影響を調査し、3名の学習者を対象とした1週間のシャドーイング練習によりアクセントやピッチ幅の改善が顕著に現れたことを報告している。ある程度の長さのある文を止まらずに発音していくシャドーイングが単音レベルのみでなく、さらに大きな単位で発音改善の効果を持つものではないかと推測できる。

次に本研究の実験協力者であるタイ人日本語学習者の発音について、その特徴と日本語発音上の困難さを指摘した研究を以下に挙げる。

- 1) タイ語に同じ音がないため、「シ」と「チ」、「ス」と「ツ」の区別や発音が困難である（サウワニー、2004）。また日本語の/u/は子音の摩擦音的要素が影響し、タイ語にはない中舌的な発音が現れるため「ス」「ツ」「ズ」はタイ人にとって発音が非常に困難である（鈴木、1963）。
- 2) タイ語には日本語のガ行とザ行のような音が存在しないため発音が難しく、ガ行をタイ語の [k] や [ŋ]、サ行を [s] で代用している学習者が多い（サウワニー、2004）。
- 3) タイ語にも短母音と長母音があるが音節末にくる母音は長母音に限られているため、日本語を発音するとき短母音を長母音で発音する傾向がある（サウワニー、2004）。
- 4) タイ人が日本語の助詞「ガ」「ニ」「ヘ」「デ」「ト」「ヲ」を発音する場合、長く発音する傾向がある（ヌアサニットラッチ、1993）。
- 5) タイ語では短母音が音節末にくる場合は必ず声門閉鎖音や内破音が伴う（大西、1976）。タイ人日本語学習による発音の誤りの傾向として、日本語の母音の後に声門閉鎖音 [ʔ] が入る（松崎・河野、1998）。
- 6) タイ語には全ての単語に声調²があるため、日本語の単語をアクセントの知識なしで声調をつけて覚えてしまう（サウワニー、2004）。
- 7) タイ語は「音節」が最も基本的な最小単位であるのに対し、日本語は「拍」が最小の単位であるため、学習者にとっては促音の発音が困難である。日本語学習者には促音の発生と消滅と双方の傾向が見られる。（サウワニー、2004）。

このように日本語学習者は母語にない日本語発音に困難を感じ、また母語の発音法を日本語発音にもとりこむ傾向があることがわかる。

2.2 シャドーイングと学習者意識に関する先行研究

玉井 (2005) において、シャドーイング指導を受けた学習者の意識についての研究が行われている。6日間の集中的指導を受けた大学生を対象に質問紙による調査を行ったところ、学習者に意識されたシャドーイングの効果として以下の3点が明らかになった。1) プロソディーの改善 2) (楽に口が動くなど) 運動としての発話力に関する改善 3) 聞き方に関する改善である。聴解力が変化したという意識にはプロソディーに関する要因と聞き方に関する変化が貢献していることも示唆された。2回目の調査では2ヶ月半の指導を受けた短大生のジャーナルを用いて、学習者が意識したシャドーイングの効果を質的に分析している。その結果、シャドーイング指導当初、学習者が聞けないあるいは音声化できない等による強い苛立ちを経験するという問題点が指摘された。改善された点としては 1) 音に対する反応がよくなったこと 2) シャドーイングに慣れ、入力音声の復唱が楽になったこと 3) 英語を聞く姿勢が変わったことが挙げられている。

3. 研究目的及び研究課題

前述のように、外国語および第二言語の発音に対するシャドーイングの有効性が報告され、日本語教育においてもシャドーイング練習による発音への効果について研究が進められている。しかし、短期練習が日本語学習者の発音にどのように影響するのか、また母語であるタイ語の影響を受けた日本語学習者の発音が、シャドーイングによって改善されるのかを検討した研究は管見の限りない。また、シャドーイングによる言語能力の変化のみでなく、学習者意識について検討することにも意義があると考えられる。効果的な言語習得のためには学習者に高い動機や自信があることが必要であるとする Krashen (1985) の情意フィルター仮説を踏まえると、日本語教育でシャドーイングを実践する際、学習者がその練習法をどのようにとらえるのかを指導する側が認識しておくことは、学習効果を図るために必要であると思われる。玉井 (2005) においても、ある指導法が受け入れられるためには実際の効果が確認されるだけでは十分でなく、教育効果が個々の学習者の内的変化としてどのように受け入れられているかを指導者は知っておく必要があると指摘されている。以上のような観点から、2つの研究課題を設定した。

研究課題1：短期間のシャドーイング練習を通じて学習者の発音はどのように変化するのか

研究課題2：シャドーイングの効果を学習者はどのようにとらえているのか

4. 研究方法

4.1 研究デザイン概要

短期間のシャドーイング練習が及ぼす同一個人内の変化を検討する目的で2006年3月に10日間の単一事例実験³を行った。実験協力者は日本の大学入学を予定していたタイ人の日本語学習者(男性・20代)で、実験時の滞日歴は1年半、日本語のレベルはSPOT (Simple Performance Oriented Test)⁴により中上級と判断された。データ収集および分析については単一事例実験の枠組みのなかで可能な方法を採用した。本稿におけるシャドーイングによる発音面と学習者意識の変化については、シャドーイングという処

遇を行った後半5日間の処遇期におけるデータを使用した。

4.2 指導方法

練習に使用した材料は過去に発行された『日本語ジャーナル』（アルク）のなかの2分程度の時事関連ニュースである。事前に協力者が興味のあるものをランダムに選び、1回につき1つのニュースを練習として用いた。毎回異なるニュースを使ったため5日間で5種類のニュースを使用したことになる。CDをそのまま使用するとスピードが速くシャドーイングが困難になるため、カセットテープに録音しプレイヤーのスピードを遅めに設定した上でシャドーイング練習を行った。鳥飼（2003）の「標準演習パターン」を参考に毎回以下の手順で進めた。下線の音読については研究課題1のデータを収集するために加えた手続きである（4.3.1参照）毎回の練習時間は30～40分程度であった。

- 1) スクリプトを目で追いながら、シャドーイングするニュースを数回聞かせる
- 2) スクリプト音読
- 3) プロソディーシャドーイングをさせる（1回、ICレコーダーに録音）
聞かえてくる音に集中して行うシャドーイングで、未知の語彙などがあってもとにかく聞いたそのまま追いかけて発音していく。
- 4) スクリプトを見ながら、内容確認を行う
協力者のわからない語彙や表現などがあった場合、ここで実験者と確認を行う。
- 5) コンテンツシャドーイングをさせる（1回から2回、ICレコーダーに録音）
内容に注意を向けて行うシャドーイングである。
- 6) スクリプト音読
- 7) シャドーイングの確認
協力者に5)で録音したシャドーイングを聞かせ、自身のシャドーイングのチェックをさせる。

4.3 データの概要

4.3.1 研究課題1のデータ収集方法

データを収集したのは全10日間の実験期間のうち、後半の5日間（処遇期）である。指導方法の部分（4.2）で記したように、シャドーイングによる発音面の変化を検討するために、毎回練習前と練習後にその日にシャドーイング練習するスクリプトを音読してもらった。スクリプトの漢字には適宜ふりがながついていて、協力者が読めない漢字はなかった。この2つの音読を毎回ICレコーダーに録音し、数回のシャドーイング練習が発音にどのように影響するのかを検討する。

4.3.2 研究課題1の分析方法

発音の評価項目については、協力者の発音に顕著に現れた特徴を中心に設定した。各項目の練習前と練習後のスクリプト音読における誤用数を比較することで、発音面の変化を見ることにする。スクリプトを

各項目に適する評価単位に分け、発音の誤用があればその単位で1点の誤用とする。練習後に誤用が減っていたらその項目についてシャドーイングが影響を与えたと見なした。誤用のカウントにあたっては、実験者の他に現役の日本語教師1名に協力を得た。各項目に対して発音が不自然であると2名の判断が一致したものについてのみ、誤用として数えた。評価項目は以下の通りである。

1) 文の切れ目を長く高く発音する傾向 (以下、文の切れ目の発音誤用)

先行研究でも指摘されたように、タイ人には日本語の助詞を長く発音する傾向がある。実験協力者も日本語を発音する際に文の切れ目、特に助詞を不自然に長く高く言う特徴が見られたため、評価項目としてこれを設定した。誤用が音節単位ではなく、単語+助詞の部分で起こる傾向があったため評価単位は「単語+助詞」とした。

2) 声門閉鎖音

タイ人が日本語を発音する場合、母音の後に声門閉鎖音が入る傾向があると言われている。協力者の発音についても声帯が一瞬詰まったように発せられる音が現れる特徴があった(日本語母語話者には促音挿入に近い音に聞こえる)ため、この声門閉鎖音についても評価項目に入れる。評価単位は母音単位に限る。

3) アクセント

母語のタイ語と日本語とではアクセント体系が異なり(タイ語は声調が存在する)協力者が日本語アクセントの習得に困難を感じていたため、アクセントについても評価項目に入れる。評価単位は高低アクセントを持つ単語+助詞を1つの単位とする。複合語のアクセントの誤用についてもこの項目に入れる。

分析の対象としたデータであるが、5日目のシャドーイング練習後の音読に関しては録音が劣悪であったと判断してこれはずし、処遇期1日目から4日目の練習前と練習後の音読(8回分)を評価の対象とした。

発音の評価についてはもう1名、日本語教育を専攻しているタイ語母語話者からの協力を得た。シャドーイング練習前後の音読を聞いてもらい、タイ人にとって難しい日本語発音の変化についてコメントしてもらい、その項目について発音の具体例を見ていく。

4.3.3 研究課題2のデータ収集方法

処遇期において、毎回のシャドーイング練習後にデータを収集した。協力者にその日の練習の感想を言ってもらいICレコーダーに録音した。実験最終日には、協力者がシャドーイングの効果をどうとらえているかに関する5件法の質問紙調査を行った。質問紙の質問項目については、玉井(2005)を参考に11問(結果5.2の①~⑪まで)を作成し、⑫⑬については本実験前に2回行ったパイロット実験のなかで実験協力者から得られたコメント元に付け加えた。各項目に対する回答は「強く思う」を5、「そう思う」を4、「変わらない」または「わからない」を3、「そう思わない」を2、「全然そう思わない」を1とした5段階の評価である。その他、実験のなかで観察された事項や協力者からのコメントは、補足的資料としてメモにとりデータとした。

4.3.4 分析方法

ICレコーダーに録音した感想は文字化し、コメントの内容を質的に分析する。質問紙データは各質問項目の評定を比較し、協力者がとらえているシャドーイング効果を検討する。

5. 結果と考察

5.1 研究課題1の結果

数回のシャドーイング練習によって協力者の発音はどのように変化しただろうか。設定した3つの評価項目に対する練習前と練習後の誤用の詳細を表1から表3に示す。ここで示す誤用率とは評価単位全体に対して、どのくらいの割合で誤用が現れたかを示す。また練習前後の平均誤用率を比較し表したのが図1のグラフである。

表1 文の切れ目の発音誤用の変化

文の区切りの発音	練習前 誤用数	評価 単位	誤用率	練習後 誤用数	評価 単位	誤用率	誤用 減少率
初日	19	73	26%	11	73	15%	11%
2日目	12	91	13%	5	91	5%	8%
3日目	5	66	8%	2	66	3%	5%
4日目	14	79	18%	10	79	13%	5%
合計	50	309	(平均) 16%	28	309	(平均) 9%	(平均) 7%

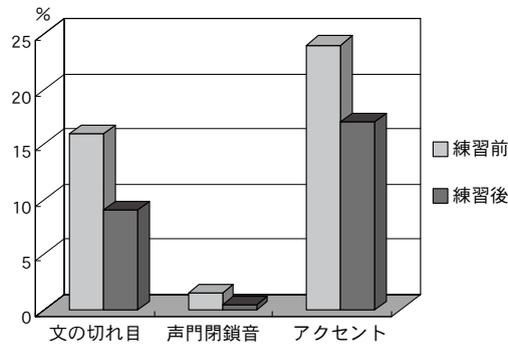
表2 声門閉鎖音の変化

声門閉鎖音	練習前 誤用数	評価 単位	誤用率	練習後 誤用数	評価 単位	誤用率	誤用 減少率
初日	6	335	1.8%	2	335	0.6%	1.2%
2日目	4	372	1.1%	2	372	0.5%	0.6%
3日目	2	287	0.7%	1	287	0.3%	0.4%
4日目	8	338	2.4%	2	338	0.6%	1.8%
合計	20	1332	(平均) 1.5%	7	1332	(平均) 0.5%	(平均) 1.0%

表3 アクセント誤用の変化

アクセント	練習前 誤用数	評価 単位	誤用率	練習後 誤用数	評価 単位	誤用率	誤用 減少率
初日	15	73	21%	14	73	19%	2%
2日目	11	91	12%	3	91	3%	9%
3日目	22	66	33%	17	66	26%	7%
4日目	23	79	29%	15	79	19%	10%
合計	71	309	(平均) 24%	49	309	(平均) 17%	(平均) 7%

図1 練習前後の平均誤用率の変化



練習前の誤用総数から見るとアクセントの誤用が最も多かった。特に固有名詞や複合語のアクセントは長い単語ほど誤用が見られた。協力者の日本語発音の癖ともいえる文の切れ目の発音誤用も、練習前の誤用率が平均16%と比較的多く見られた。声門閉鎖音については、どのスクリプトについても現れ、平均で全母音数の1.5%に見られた。

練習後の誤用数は、すべての項目に対して減少していることがわかる。減少率で見ると、文の切れ目の発音誤用とアクセントの誤用が各7%の減少となった。声門閉鎖音に関しても練習後は毎回とも出現が少なくなっていた。

5.1.2 研究課題1の考察

練習前後の音読比較の結果から、数回のシャドーイングでも発音改善の有効性はあると考えられる。評価対象とした3項目のなかで文の切れ目の発音については誤用減少率が初回から高く、練習の即効性が窺えた。練習後は助詞を長く高く発音する癖が軽減し、文の切れ目が自然につながるという改善が見られた。これはシャドーイング練習によって発音のスピードが上がり、速く読もうとすることでより原音に近い音が出せるようになったと考えられる。しかし協力者にとって新規性の高い話題に関するスクリプトの場合には、音読時に意味を考えながら読んでいる様子が見られ、その際に文の区切れが上がる癖が残ってしまうこともあった。アクセントについても誤用の平均減少率が7%と練習による改善が確認された。高橋(2006)においてシャドーイングを経験した学習者が「頭のなかでモデル音が聞こえる」と述べているが、練習で聞いたそのままの音を繰り返すことで正しいアクセントが頭に残り、それが練習後の音読にも影響したのではないかと推測できる。今回使用したニュースのスクリプトは多くの複合語を含んでいたが、特に複合語のアクセント習得に効果が見られた。例えば「自由貿易協定」などは、練習前に一つ一つの言葉をそれぞれのアクセントで読んでいるような感じがあったが、シャドーイング後にはまとまった複合語のアクセントで音読されていた。ただし長い複合語になると、数回の練習では改善が見られなかった。また、誤用アクセントが化石化してしまった単語(例えば協力者にとっては「フィリピン」の「リ」を高く言うなど)は練習後も依然として誤用が残った。タイ語母語話者の特徴と言える声門閉鎖音についてであるが、練習後は出現が減少したことから、母語の影響を受けた発音に関しても練習効果が見られたと言えるだろう。

上記のように数回の練習でも発音改善の効果が見られたのは、練習によって協力者のモニター機能が強

化されたことにも理由があると考える。高橋（2006）でも発音を意識してモデル音を繰り返し聞くという行為で学習者のモニター力が活性化される可能性があるとして指摘されている。協力者も聞こえてくる音と自身のシャドーイングの音を照らし、適宜調整を行いながら繰り返すことで、自然な発音に近づくことができたのではないだろうか。毎回の練習の最後に協力者に自身のシャドーイングをチェックさせるステップを踏んでいたことも、発音改善に効果があったように思う。実験者は何のフィードバックも行わなかったが、協力者は深い興味を示し自身のシャドーイングを確認していた。その際に自身の発音を客観的に振り返り、改善につなげていたのではないだろうか。

タイ語母語話者の評価者には、母語話者の立場から練習前後の協力者の発音についてコメントしてもらった。上記の3つの評価項目と比べ、誤用の出現は目立たないものであったが、練習により改善された点として以下が挙げられた。

1) 濁音の改善

タイ人学習者にとっては難しい、日本語の濁音に改善が見られた。

例) 「中国」 練習前「ちゅうこく」→練習後「ちゅうごく」

2) 母音の長さ

母音を長く発音してしまう誤用が改善された。

例) 「過去」 練習前「かこー」→練習後「かこ」

3) 撥音の改善

タイ人学習者にとっては撥音も難しく短く発音してしまう傾向があるが、練習後には改善が見られた。

例) 「訓練」 練習前「くれん」→練習後「くんれん」

4) 拗音の改善

拗音の発音もタイ人にとって困難であるが、練習後の発音では日本語らしく発音できるようになった。

例) 「協定」 練習前「きようてい」→「きょうてい」

5) カタカタ語の改善

「マリナーズ」「レンジャーズ」などのカタカナ語は、練習後には英語の発音でなく、日本語らしい拍がとれるようになった。

学習者にとって困難な拍や単音についても、練習後には改善が見られたが、これはシャドーイングする際の再生スピードとも関連する可能性が考えられる。高橋では（2006）ではリズムや単音の改善がアクセントほど顕著でなかったとして、その理由をシャドーイング時に被験者の意識がスピードと韻律に集中し、単音やリズムに注意が向きにくかったのではないかと考察している。本実験においては練習しやすいよう再生スピードを遅めに設定していた。シャドーイングで再生できた項目については、単音や拍など発音面の細部にも改善が見られたとも推測できる。単音の改善を報告した萩原（2005）でも学生が問題なくシャドーイングできるよう、「ナチュラルスピード」の他に「ゆっくりスピード」のCDがある教材を使用しており、シャドーイングができない学生が遅いものから速いものへと2段階で練習できるようにしている。このことからシャドーイングさせる教材のスピード、それに伴う再生の程度などで改善される項目に変化が見られるという推測もできるだろう。また本実験ではニュース、高橋（2006）では会話を材料と

して使用しており、スクリプトの違いによって、改善される項目も異なることが予測できる。本研究で使用したニュースのスクリプトについては、実験当初に協力者の興味で選んだものであり、難易度を綿密に統制したものではなかった。例えば4日目に使用したスクリプトはアメリカ大リーグでのイチロー選手の活躍を伝えるもので、カタカナ語を多く含むものであったため、数日間練習を続けたにもかかわらず評価対象3項目の練習前の誤用率が高かった。今回の反省を踏まえ、今後の実験では使用するスクリプトに含まれるカタカナ語の割合など難易度に考慮する必要があると考える。

研究課題1ではシャドーイングの発音面への影響を検討した。数回のシャドーイングでも発音改善の即効性がうかがえた。また母語の影響による発音に関しても練習後には改善が見られた。しかし化石化した発音や学習者にとって困難とされる音については、数回の練習ですぐ改善されるわけではない。継続的なシャドーイング練習を行い、誤用として定着した発音や学習者にとって発音が困難なものにも改善がみられるのか検証する必要がある。

5.2 研究課題2の結果

練習のなかで協力者の述べた感想をまとめる。練習初日には「ちょっと難しすぎたんだけど自分でもがんばってるから、文章とかだんだん覚えられるようになってきて、初日だけちょっと効果を感じていますね。ストレスは全然ないです。大丈夫です。」と述べている。2日目には「練習で日本人の感覚がつくと思います。もしやるとしたら、ドラマの流れてきた会話とかを覚えて、覚えてから、自分で同じように発音してもっときれいな発音ができると思います。」と語っているが、「昨日は初めてだったからなんとかがんばって、と楽しんでいきましたけれども、今日は疲れで大変だった。」と疲労感を感じたと述べていた。3日目には「僕にとって一番大切なのは集中力と聴解力、よく聞いて集中してよくできると思います。シャドーイングをすると音に集中できます。シャドーイングの後でテープを聞くと集中は続きます。効果があるかもしれません。」と集中力についても言及している。4日目には「どんどん熱くなってきた。やりたいの意味です。やりたい気がまんまんです。」と意欲を見せ、「難しくてもよく聞いたら、たぶんよく聞こえて音どおりにシャドーイングできると思います。流れてきた音どおりに、文章の音を覚えて、例えば難しいことばを覚えられます。もう一つのメリットは、専門用語というんですね、言葉を増やして、どんなフレーズでも聞こえるようになると確信しています。」と話し、語彙の習得についても効果を感じているようであった。最終日は「最初やった時には大変だったけれど、慣れてくると面白くなってきて、楽しんできました。これから暇な時に自分でやってみたいです。」と話していた。

実験最終日行った質問紙における各項目に対しての5段階評価は以下のとおりとなった。【 】に5段階評価を示す。

- ① 日本語のアクセントやイントネーションがわかるようになった【5】
- ② 日本語のアクセントやイントネーションを自分で表現できるようになった【4】
- ③ 聞いた日本語を頭の中で保てる時間が長くなった。【5】
- ④ 聞いた日本語の意味を日本語のままわかるようになった【4】
- ⑤ 一語一語まで聞き取ろうとするようになった【4】
- ⑥ 日本語を速く音読できるようになった【4】
- ⑦ 日本語の発音がよくなった。【3】

- ⑧ 心の中で無意識に日本語を繰り返すようになった【4】
- ⑨ 日本語を発音するスピードが速くなった。【3】
- ⑩ 前より柔軟に（楽に）口が動くようになった【4】
- ⑪ 日本語のリスニング力が前より増した【4】
- ⑫ 日本語の単語や表現を覚えるのに効果がある【5】
- ⑬ 勉強する気持ちを強めるのに効果がある【5】

5.3 研究課題2の考察

指導後の感想からは認知負荷の高いシャドーイングに対し、困難さを感じていることがわかる。練習初日には「難しすぎた」と語っているし、2日目には「疲れて大変だった」と述べている。先行研究において、指導当初のシャドーイング練習に対する学習者の情意面での問題点が指摘されているが（玉井、2005）本研究の協力者について言えば、難しさは感じているものの「ストレスはない」と答えていることから否定的な感情は見られなかった。慣れてくると練習に対し「楽しんでいる」といった肯定的な意見も出てきた。特徴的であったのは練習終盤に「だんだん熱くなって」「やりたい気がまんまん」と語ったように、シャドーイングが学習動機を高める様子が窺えることである。初めのうちは多少困難を感じても、シャドーイングができるようになってくると積極的に練習に取り組めたようだ。感想データから協力者が感じている効果として次の3点が挙げられるだろう。1) 聴解面での効果 2) 発音面での効果 3) 語彙や日本語表現習得への効果である。聞いた情報の再生を行うシャドーイングは集中力を必要とする作業で、その集中力が聴解に結びつくこととらえられていることがわかる。練習によって聞き方が変わる可能性が示されている。発音については特に第2日目に「日本人の感覚が身につく」という表現でその効果を表している。練習を続ければ、目標言語らしい発音ができるということだろう。最も頻繁に現われた効果についてのコメントは3)の語彙や表現が習得できるという点である。シャドーイングをすることで言葉や文章、さらに専門用語を覚えられ、語彙を増やすことで最終的に聴解力につながるというコメントもしている。

質問紙による評価においては協力者が「強くそう思う」の5の評定をしたのは①の日本語の抑揚理解、③の音韻保持能力、⑫の新規語彙・表現習得、⑬の学習動機であった。音声面について言えば、抑揚の理解は進み、その効果も認識している。しかし⑦発音の向上と⑨発音スピードの向上では3の評定を行っていることから、短期の練習では自身の発音改善には至らなかったという評価であろう。③「聞いた日本語を頭の中で保てる時間が長くなった」は、ワーキングメモリのリハーサル機能⁵の向上を示す結果とも関連するものであるが、協力者も聞いた音の保持にシャドーイングの効果を感じていることがわかる。⑫と⑬については感想のなかにも出てきた意見で、語彙や表現の習得にもシャドーイングの効果を強く感じていることが示された。最も多かったのは「そう思う」の4評定であるが、協力者にはシャドーイングにより母語に置き換えて理解する方法から、目標言語のまま理解する方法に変わってきていること（④）注意を向けて聞こうとする態度（⑤）が意識されている。リスニング力についてもあがった（⑩）と捉えられている。また構音速度が改善された（⑥）という意識を持っていることもわかった。心（頭）のなかで目標言語を繰り返す（⑧）習慣ができたことも示された。高橋（2006）においてもシャドーイングを経験した学習者が、実験4ヶ月後も「まだ（モデル音を）大体覚えている」と語ったという報告をしている。毎回の感想と質問紙をあわせて考えてみると、協力者は新規語彙・表現の習得と学習動機に最もシャドーイ

ングの効果を感じているようである。言語発達期において、子供が親の発話を繰り返す (Bohannon & Stanowicz, 1989) だけでなく、新規語彙や新たな文構造が言語システムに完全に定着するまで選択的に模倣されることが報告されている (Lightbown & Spada, 1993) が、学習者意識を探るデータからもシャドーイングという活動が人間の新規語彙・表現の習得に深く関わっていることが示唆された。またシャドーイングを肯定的にとらえ、練習のなかでその効果を自覚することが学習動機につながっていくと考える。

6. 今後の課題

本研究では短期のシャドーイングによる同一個人内の変化を詳細に検討した。今後、現場での実践にあたり、シャドーイングが日本語学習者の言語習得にどのような影響を与えるのか、中長期的に多数を対象とした体系的研究を進め、その効果について検証してみたい。また実践法のバリエーションや評価法などについても検討していきたいと考える。

注

- 1 作動記憶・作業記憶とも訳される。言語理解など人間の高次認知活動においては、脳内ワーキングメモリの「保持」と「処理」という2つの機能が働いている。またワーキングメモリにおける処理資源には一定の容量があるとされる。
- 2 一音節内での発音の高低が変わるようなもの
- 3 単一事例実験とは多数の被験者を集めるのが困難な領域や平均値では消されてしまう一個人内の変化に興味がある場合に有効であるとされる。唐澤 (2009) ではABデザインを採用している。これは何らかの処遇の効果を見たい場合に、処遇なしで変数データを測定するベースライン期と、処遇を行い変数データを測定する処遇期を設定し、各期のデータを比較することで処遇の効果を測定するものである。
- 4 学習者が自然な速度の音声テープを聞きながら、解答用紙に書かれた同じ文を目で追っていき () で示された文中の空欄に、聞こえた音 (ひらがな一字) を書き込むテスト (迫田, 2002) 日本語の総合的な能力の評価ができるということが大きな特徴として挙げられる (小林他, 1996)
- 5 ワーキングメモリの音韻ループ上でリハーサルが続く限り、入力情報が保持されるといわれる。唐澤 (2009) では復唱力の測定も行いシャドーイングによる情報保持機能向上が示唆された。

参考文献

- Acton, W. (1984) Changing fossilized pronunciation, *TESOL Quarterly*, 18, 71-85
- Bohannon, J. & Stanowicz, L. (1989) Bidirectional effects of repetition in conversation : a synthesis within a cognitive model. In Speidel, G. and Nelson, K., editors, *The many faces of imitation in language learning*. New York: Springer-Verlag, 121-150
- Krashen, S. (1985) *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. New York: Longman
- Lambert, S. (1988) A human information processing and cognitive approach to the training of simultaneous interpreters. In D.L. Hammond (Ed.) *Languages at Crossroads*. Proceeding of

- the 29th Annual Conference of the American Translators Association, 379-388.
- Lightbown, P. & Spada, N. (1993) *How language are learned*. Oxford: Oxford University Press
- 大西晴彦 (1976) 「タイ人のアクセントに関する若干の考察」『国際学友会日本語学校紀要』第1号
24-44
- 唐澤麻里 (2009) 「日本語学習者の聴解能力に対するシャドーイングの効果」『お茶の水女子大学 人文科学
学研究』第5巻, 185-196
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元哲史 (1996) 「日本語能力の新しい測定法 [SPOT]」『世界の日本語教育』
第6号, 201-218
- サウワニー・スタートーンタイ (2004) 「日本語の発音における母語の影響について—タイ人日本語学習
者を対象として—」『外国語学研究』169-175 大東文化大学院外国語学研究科編
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得』アルク
- 鈴木忍 (1963) 「発音指導とその問題点—タイ語国民を中心に」『日本語教育』第2号
- 染谷泰正 (1996b) 「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について」『通訳理論研究』11号, 27-44
通訳理論研究会
- 高橋恵利子 (2006) 「シャドーイングが発音に与える影響」『2006年度日本語教育学会秋季大会予稿集』
57-62
- 玉井健 (1997) 「シャドーイングの効果と聴解プロセスにおける位置づけ」『時事英語学研究』第36号,
105-116
- 玉井健 (2005) 『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』風間書房
- 鳥飼玖美子 (1997) 「英語教育の一環としての通訳訓練」『言語』26巻 9号, 60-66
- 鳥飼玖美子 編著 (2003) 『はじめてのシャドーイング』学習研究者
- 萩原廣 (2005) 「日本語の発音指導におけるシャドーイングの有効性」『京都経済短期大学論集』第13巻,
第1号, 55-71
- 松崎寛・河野俊之 (1998) 『日本語教師分野別・マスターシリーズ よくわかる音声』アルク
- 三浦信孝 (1997) 「通訳理論から外国語教授法へ」『言語』26巻 9号, 48-55